

【第七三回大会を迎えるにあたって】

『川合』と「里沼」——利根川・渡良瀬川合流域の歴史像——

常任委員 会
第七三回（館林）大会実行委員会

地方史研究協議会は、第七三回大会を本年10月21日（土）から23日（月）までの三日間、群馬県館林市で開催する。本会常任委員会および開催地の研究者を中心に組織された大会実行委員会では、大会の共通論題を「『川合』と「里沼」——利根川・渡良瀬川合流域の歴史像——と決定した。

群馬県内では、一九五三年の「群馬県大会」に続き、第三五回大会（一九八四）を前橋市で、第五五回大会（二〇〇四）を高崎市で開催した。後者二大会の共通論題は、「内陸の生活と文化」と「交流の地域史——ぐんまの山・川・道——」であり、いずれも内陸部や山間地域を対象に群馬の地域性を追究してきた。一方、県東部に目を移すと、利根川・渡良瀬川の二つの大きな河川に挟まれた邑楽台地は、これまで対象としてきた地域とは自然環境が大きく異なる。本大会では、行政・政治的背景に規定された国境や県境にとらわれず、二大河川に係る範囲を『川合』（かわあい）と称し、その合流域を対象地としたい。

『川合』の地域では、自然堤防上に造られた沼除堤や水防建築の水塚など、水との関わり、あるいは闊いのなかで景観が形成されてきた。これらの景観は、例えば板倉町では「利根川・渡良瀬川合流域の水場景観」として重要な文化的景観に選定されるなど、保全と活用が進められている。そうしたなか、館林市では沼と人びとが共生しながら現在まで繋いできた歴史・文化、暮らしや生業を営む場を「里沼」（さとぬま）と表現し、その特有の沼辺文化が日本遺産に認定された。

近年、人びとが日常的に利用してきた雑木林や草山を「里山」と呼ぶことが一般化しつつあり、それに対置される概念として「里海」「里湖」（さとうみ）、そして「里沼」が提唱された。「里沼」では、周囲に暮らす人びとが水辺に棲息する魚類や水鳥など生物資源を得るだけでなく、水生植物を肥料や燃料などに利用して、用益地に改変しながら自然環境と向き合ってきた。こうした点をふまえ、本大会では水と人びとの関わりに注目し、利根川・渡良瀬川合流域における『川合』と「里沼」の歴史像を実証的に明らかにすることを目的とする。

縄文海進では、茨城県古河市周辺まで海水が進入し、利根川・渡良瀬川合流域にも貝塚が多く残された。寒冷化した縄文後・晩期には、邑楽台地の谷の出口が沼沢地となる。このころ、荒川低地に流れていた利根川本流が現在の谷田川流路を流れるようになった。四世紀には、利根川・渡良瀬川を通じて古墳文化が伝わり、六世紀後半には堂山古墳・山王山古墳などが築かれた。

古代には、台地西部にある大泉町仙石付近に利根川の渡し場が設けられ、武蔵国に至る水陸交通の要所となった。古代社会では、河川や池溝とそれらにともなう堰堤に関して様々な規定が設けられたが、沼についてはいくつかの太政官符などに見えるだけで、行政的施策の対象として注目度は低かった。その一方、『万葉集』からは伊奈良の沼に生える大藺草が歌に詠まれているように、沼地の恵みに支えられた暮らしの情景がうかがえる。

中世になると邑楽郡が一郡規模で荘園化され、邑楽御厨あるいは佐貫荘と呼ばれるようになった。佐貫荘は洪積台地と利根川・渡良瀬川がつくった沖積低地に領域的に立地している。武士団佐貫氏は当初、湿地が卓越していたであろう邑楽台地南辺を本拠とした。その後、次第に台地北辺の渡良瀬低地に進出し、安定的な用水を利用することで、今日の穀倉地帯の礎を築いた。邑楽郡内には、ナガラ（長柄）・長良（神）社が三〇社以上分布し、特に利根川と谷田川沿いに多く見られ、水辺の開発と佐貫荘経営を祈願して勧請された。戦国時代には、古河公方の鴻巣御所をはじめ、赤井氏の館林城、広田・木戸氏の羽生城、成田氏の忍城など、沼を利用する城郭が構築され、領域支配をおこなう政治拠点として機能し、赤岩などの渡河点とあいまって交通機能も整備された。沼では鯉漁と水鳥猟がおこなわれ、古河公方や小田原北条氏に献上された。

初代館林藩主となった榊原康政は、館林城の拡張工事や城下町の整備、利根川・渡良瀬川の築堤工事を実施した。館林城は城沼の西岸に位置し、南岸の躑躅ヶ崎は周囲の景観を彩る名所として藩領外からも花見客が訪れる行楽地となった。徳川綱吉が藩主であった時期には、矢場川の付替えがおこなわれ、渡良瀬低地の水を減らすため開発が進められ、下野国の一部の村を上野国に編入し、国境が変更された。同時期、領内には一六の比較的大きな沼があったとされ、古来よりの漁撈や藻草などの採集に加え蓮根栽培も広まったが、沿岸の干上りや新田開発によって規模や数を縮小させていった。地域を潤した用水は、主に渡良瀬川に設けた四堰から引き入れた。多々良沼・近藤沼・大輪沼は用排水をうけ村々の水源となった。低湿な地面や沼底の泥を掻き上げて造成する田地は掘上田と呼ばれ、近代以降も開発は続き、一九七〇年代まで存在した。このように、領主的な開発と民衆による開発が併存しながら今日の「里沼」景観が形成されてきた。

明治以降、殖産興業政策により、第四十国立銀行・館林製粉（後に日清製粉）・上毛モスリンなどが創設された。一方、足尾銅山などの鉱山開発は、河川を汚染し、山の保水機能を失わせ、公害を引き起こした。この事件により公害に対する民衆運動の新たな形が提示された。また、東武鉄道などの開通は河川輸送を衰退させたが、館林は邑楽地域における物資の集散地として機能した。戦後、農業生産の拡大や工業団地の造成のため、多くの沼が埋め立てられ、「里沼」は消滅あるいは縮小していった。しかし今日では、自然との共生を図り、『川合』の景観を守る資源として、後世に継承していくための活動が進められている。

『川合』と「里沼」に関する様々な歴史的事象を学術的に明らかにすることにより、利根川・渡良瀬川合流域の歴史像を検証することは重要な試みだと考える。活発な議論がおこなわれることを期待する。